

読書に関するエッセー入賞作品集 2025

「今、いちばん読んでほしい本！」

または、あなたの読書法・読書論について

小学生の部 最優秀賞

今から八十年前の記おく

浜田小学校 五年

鮫島 誠 法

「対空戦闘用意！」今年の夏、楽しみにしていた映画「雪風」のワンシーンである。ぼくは、軍艦が大好きで、図かんを見て、絵をかいたり、プラモデルを作ったりして楽しんでいる。軍艦は、戦うために設計されていて、そのむだのない洗練されたフォルムがとてもかっこいい。父が自衛官だったこともあり、今の夢は、海上自衛隊員になることだ。

この夏休み、呉市に行った。戦艦大和、映画の雪風をはじめ、数々の軍艦が造られ、戦地へと旅立っていった港を見てみたいと思ったからだ。そして現在は海上自衛隊の基地や博物館「てつのくじら館」もある。軍艦クルーズでは海上自衛隊の潜水艦や護衛艦を間近に見ることができ、実物の迫力に圧倒された。昔の潜水艦が見学できる「てつのくじら館」では、戦争の歴史や海上自衛隊のことをより詳しく学ぶことができた。

夕食後、何気なく立ち寄った地元の本屋で、「赤い日」という本が目飛び込んできた。この本は、地元・呉市出身の作者

が祖父の体験談をもとに描いた作品だ。「赤い」とは対照的な不気味な黒い表紙を、恐る恐る開いた。そこには、今ぼくが見ている美しい呉の町が、空しゅうによりいつしゅんで、夜空が炎と熱に包まれて、昼よりも明るくなった光景が書かれていた。いつしゅに逃げていた友人は、気が付いたら形もなく飛び散っていて、その血を浴びたまま、息ができなくなるぐらいにぎゅうぎゅうづめになった防空ごうで過ごす一夜はまさに地ごく。空しゅうがおさまったあと、高台から見ると、真っ赤に燃えていた呉の町は、どす黒い焼野原になっていた。

祖母にも話を聞いてみた。祖母は当時一歳で記おくはないが、防空ごうの外に出ていこうとしたがる祖母をひいおばあさんは必死におさえつけたと聞かされたそう。戦争の記おくがない祖母でさえ、戦後の悲しい光景は目に焼き付いていて、戦争の話はしたがらない。今回も広島旅行をさそったが、行きたくないと思われた。主人公も、死ぬ間際まで誰にも戦争の記おく

くを話さなかった。そして原ばくが落とされた広島のこととは、ついに誰にも話さなかった。話したくない、話せない記おくって一体どんなことなんだろう。想像しただけで心が痛む。

ぼくは、次の日、母に連れられ、呉海軍墓地に行ってお参りをした。たくさんの方の名前が連名で記されていた。ぼくが好きな軍艦の歴史の裏には、当たり前の幸せをうばわれた、たくさんの方々のがせいがあつたことを改めて実感した。そして戦

争は絶対にやってはいけないと心から思った。

日本はまだ平和だけど、周りを見ると戦争が絶えない。日本はロシア、北朝鮮、中国にはさまれており、アメリカとの同盟だけでは心配な状況になってきている。こんな今だからこそ、戦争がどういうものかを知ってもらうため、この本をお勧めしたい。

『赤い日』（長田真作、汐文社、二〇二五）

小学生の部 優秀賞

新しい自分の存在を生み出す 新しく見つけた興味

暁小学校 六年

黒田 航 平

ぼくには、いつも読みたくなる本があります。その本は、現実のことについて語っています。

それは、『ヒエログリフ入門』というエジプト文字のことについて書かれている本です。

ヒエログリフとは、紀元前のころにエジプトで活用された文字です。鳥や犬などの動物や、道具などの絵を文字に表したものです。

ぼくがエジプトに興味を持った理由は、二つあります。

一つ目は、未だにまだ分からないことがたくさんあるからです。分からないことが多ければ、古代のエジプトのすがたを知りたいという気持ちが増えてきます。

二つ目は、エジプトのことを少しでも知れたら、知りたかったエジプトのすがたが少しづつ見えてくるからです。この本を初めて読んだとき、一つの単語が、今とはちがう、難しい言葉の使い方をしていると感じました。例えば、それだけではなく、

今よりもとても個性的な文化や、自分とちがう考えを持つ人々がいたことを感じました。

ぼくが一番好きなのは、ヒエログリフで刻まれているへき画について語っているところ。なぜかという、古代エジプトのことについて書かれていることを日本語に直してヒエログリフの覚え方などが書かれているからです。しかも、どのような言葉を使うときにどのヒエログリフを使えばよいのかということまで書かれているので、とても分かりやすいです。

そして、一番分かりやすいのは、一文字のヒエログリフだけで、いろいろな意味を持っていることを教えてくれていることです。

例えば、「切る」というヒエログリフ一単語だけで、他にも「刻む」などの意味があることも書かれています。

ぼくがこの本を今、一番読んでもほしい理由は、エジプトのような不思議にあふれた国などについてもっとふれてほしいと思ったからです。新しいことにしかふれていないと、今までの出来事や歴史物にふれないままになります。そうすると、今までの自分の考えも変わらないままになってしまいます。そのようなときにこの本を読めば、自分とちがう視点も見つかるので、今までの自分を見直し、新しい自分を見つけることができます。

ぼくは、この本を何回も読んでいます。この本を読んだおかげで、自分と全くちがう存在である人のことを知ることができました。これまでは、自分には無かった興味を持つことができました。今まで手に取らなかった本を読むことで、新しい存在を知ったり、興味を見つたりすることができそうです。そのような

新しい興味を持たせてくれるこの本を、色々な人に読んでもらってほしいです。そして、この本を読むときも、いつもの自分を見直していきける自分になってほしいです。

『楽しいヒエログリフ入門』
(クリスチャン・ジャック、草思社、二〇二四)

小学生の部 優秀賞

平安、いとをかし！

暁小学校 六年

中村 椎南

「キター!!! 新刊!」

私は、この本を見たしゅん間そうさげんでいた。この本は、去年大大ブームを巻き起し、今でも飛ぶ鳥を落とす勢いの人気をほこる『成瀬は天下を取りにい』く『通しよう』成瀬シリーズ』を執筆している宮島未奈さんが書いた新刊だ。

『それいけ!平安部』とは文字通り主人公の平安大好き少女安以加が平安部を作り、仲間と共に平安部で平安の心を学んでいくというピュア度100%の青春小説だ。平安のことや学校生活、仲間と協力することの大切なことを学べる一押しの本だ。私がこの本を選んだのは、安

以加みたく、私が平安が大好きだからだ。特に百人一首や平安時代の物語が好きで、五年生のころは百人一首クラブに入っていた。平安のことを安以加ほど知っているわけではないが、平安があきない気持ちは、安以加が作中で言っている様に分かる。私が一番好きな物語は紫式部の『源氏物語』だ。この物語は去年の大河ドラマ『光る君へ』のえいきょうで大好きになった。他にも、清少納言の『枕草子』や和泉式部の『和泉式部日記』などといった平安の書物は一通り読んでいます。

そんな私よりも、もっともつと平安が大好きで物知な安以

加。そんな彼女のクラスメイトで赤染衛門似だが平安知識ゼロの葉、百人一首部の幽霊部員であるコミュニケーション力が高い明石さん、バイトメインで部活は気楽に所属している元サッカー部の大日向くん、超イケメンで安以加の幼なじみである光吉さんの個性豊かでバラバラな五人が平安部で平安の心を学んでいく。そんなストーリーと平安の知識が自然に学べる出てくる『それいけ!平安部』を私は、ぜひ読んでほしいと思う。しかし、「平安とか昔のことっぽい」と、思う人も少なからずいると思う。それに、「平安の心を学ぶって、ナンデスカ?」と、思う人もいるかもしれない。その通りである。私も、前はそう思っていた。そんな人には、光吉さんの言葉を紹介したい。

「平安の心も令和の心もそんなに変わらないんじゃないかなって気付いたんです」

私は、この言葉にすごく共感

する。平安の『源氏物語』も最初は「古っぽい巻物」だと思っていた。しかし、現代版で読むと、光源氏がイケメンで、令和の恋愛小説と同じだった。清少納言の『枕草子』も、読んでいて「超わかる!」の連続で楽しく読めてしまうエッセーである。第一、平安も令和もどちらの時代を生きているのも同じ人間だ。距離感を感じている子も話してみれば意外に気が合ったということはないだろうか。平安時代もそんな感じで知れば知るほど身近に感じる。

平安のことを知らない子供達よ、知っているけれど興味のないう大人達よ、平安大好きな友達よ、ぜひこの本を読んで、平安を知り身近に感じてほしい。きっと平安に夢中になると思う。あなたも、いざ平安へ行かむ!

『それいけ!平安部』(宮島未奈、小学館、二〇二五)

小学生の部 優秀賞

かがみの中で知った友情

暁小学校 六年

中村 美玲

ある日、かがみが光って、かがみの中に吸いこまれた。かが

みの中には孤城が、その孤城には、「願いの鍵」というものが

存在していた。三月三十日まで
に「願いの鍵」を探し、願いを
かなえる。ただし、願いをかな
えたら、城は閉じる。また、城
の中には、同じ年ぐらいの知ら
ない子たちがいる。一緒にいる
内に仲良くなっていく。そんな
物語みたいなことが、起きてほ
しい。しかし、そんな奇せきは
現実には起こらない。

「ドンッ。」

勢いよくとびらの閉まる音が
聞こえた。すぐさま鍵をかけ
る。完全に閉じこもる準備がで
きた。スマホを見ようとしたと
きにふと、学校で借りてきた本
の存在を思い出した。『かがみの
孤城』という本だった。私は辻
村深月さんという作家さんの本
が好きだ。そのえいきょうで、
『かがみの孤城』を読もうと
思った。

読み終わった後、私はひたす
らに泣いていた。自分のことで
泣いている時よりも、泣いてい
た。とにかく感動しすぎて、読
むのも苦しかった。

「友情」。それは、人生のだい
ごみであり、非常にややこしい
ものでもある。人によって成功
する確率はちがう。「友情」に
は、正解がない。しかし、誰も
が、理想の「友情」というもの
を持っている。けれど、理想通り
にはいかないし、楽しくない時
や、つらい時もある。落ちこんで
しまう時もある。そんな状況も
いつそのこと楽しんで生きてい
くのが私の理想の「友情」だ。

私はまた『かがみの孤城』の
世界に入った。本を通して、泣く
のを必死にこらえ、読み進めて
いく。結末を知るために、読んで
いて思う。この子たちの「友情」
の形が理想だなと。世代を通り
こしてまで仲よくできる。ピンチ
になったら、たとえ自分が、その
子のことを忘れてでも助ける。
彼女たちは、私にはできない「理
想」の道を進んでいく。

私は一人が好きだ。一人で部
屋に閉じこもる方が楽だ。そん
な考え方をしている私に「友
情」の大切さをこの本は、教え
てくれた。

私はこの本を通して、「友情」
の大切さを多くの人に知ってほ
しいと思った。世の中には、私
と同じ考えの人や、「友情」より
メリットを追い求める人だっ
ている。そんな人だっている。

中学生の部 最優秀賞

絆で壁を乗り越える

大池中学校 三年

杉野 暖 真

僕が「今、いちばん読んでほ
しい本」は、『黒い兄弟』だ。こ
の本との出会いは、全くもって
本を読まない僕へ、父がブレゼ
ントしてくれたことだ。しか
し、僕が全く手につけないのを

そんな人たちに、感動する「友
情」を知ってもらいたい。メ
リットを追い求めている大人
に、もう一度「友情」「仲間」と
いう感情を思い出してほしい。
社会は、「一人」ではなく「協
力」を得て、育っていくもの
だ。だから、メリットだけを追
い求めてはいけない。

私はこの本を三回以上読んで
いる。一人がいいと思ってい
た時もある私に、光を灯してく
れた。社会はややこしい。でも社
会で生きていかなければならな
い。「一人」もいいが、「友情」
もある。そして一緒にいる仲間
が必ずいるということを知って
ほしい。

『かがみの孤城』（辻村深月、
ポプラ社、二〇一七）

見かねた母が、「五分だけ、五分
だけでも見てみたら」と言っ
た。だから、仕方なく読んだ。
すると、気が付いたころには時
計の針が夜の十二時を指して
いた。この本にのめりこんでい

たのだ。

主人公ジョルジョの村が不作
に見舞われた。おばあさんに後
押しされ、ジョルジョはミラノ
のえんとつ掃除に行く。今でい
う人身売買のようなものだ。そ
んな、過酷な環境での親方から
のひどい仕打ち。だが、兄弟を
誓ったアルフレドを中心とする
仲間を心の拠り所にして、ジョ
ルジョは行動を起こす。

この本を読み始め、最初は正
直、かわいそうだな、絶対いや
だな、ぐらいにしか思っていな
かった。しかし、兄弟を誓った
アルフレドやその仲間たちとの
間に、固い絆を築き、今までバ
ラバラだったそれぞれの力を一
つに合わせて行動を起こす。何
とも言えない鳥肌が立つような
感覚になった。それは、未だか
つてない程の感動でもあった。
この先僕はこの話のような仲間
をつくることやその全員の力を
合わせて物事に挑む機会はある
だろうか。いつか僕自身で味わ
いたい。

僕には正直に言うと、彼らの
ような真の仲間がいるとは言え
ない。教室で休み時間にギヤー
ギヤー騒いでいる、いわゆる陽
キャと言われる存在が僕は好き
じゃない。でも、わざわざその
人たちの中に入って、仲良くし
ていた。自分に合っていないこ
とをわかっていながらも、無理
にその関係が続いていた。僕が
辛いとき、そばにはいてくれな
いような。そんな友情だった。

僕は選択を間違えた、もつと僕
は正直に生きるべきだった。

この本を僕が今、いちばん読
んでほしい本に選んだ理由は、
この本を読むことで、仲間と絆
を深め、協力することは、何か
大きな壁にぶつかった時に解決
できるカギとなるからだ。それ
を理解することで、今しかない
中学生の内にそのカギを手に入
れてほしい。正直、僕は手に入
れていないのではないかと思
う。この本をもっと早く読んで
おけば、成功していたかもしれ
ないと思った。だから、今のう
ちにこの本を読み、カギを手
に入れてほしい。

僕は、この本を読み、友達、
仲間がいることがどれだけ大切
なのかがあった気がする。仲
間が居たら、自分の思いを託せ
る。その友情こそが人生におい
て大切だということもよくわ
かった。僕は、この本を読んだ
人には、僕のような中途半端な
友情で終わってほしくない。僕
は失敗しているから言える。真
の友情を築くことは、いずれ自
分の人生の支えになるだろう。
だから、今いる友達は大切に
してほしい。もつと友情を深めて
ほしい。僕もそうする。いつ
か、真の友情を築いたことを良
かったと思えるときが来ると僕
は思う。

『黒い兄弟』（リザ・テツナー、
あすなろ書房、二〇二二）

中学生の部 優秀賞

キミはひとりじゃないよ

暁中学校 二年

廣瀬 甘奈

年々子どもの自殺者が増えて
いる傾向があります。二〇二四
年度の自殺者数は過去最多の五
百二十九人となっています。だ
からこそ二〇二五年には自殺者
が少しでも減ってほしいと思い
この本を読んでほしいと思いま
した。

この本の作者は宮本延春さん
です。宮本さんは、小学校のと
きからひどいじめを受けてい
たため勉強も学校も嫌になり
成績はいつもオール1、十六歳
で母を十八歳で父を亡くした宮
本さんは二十三歳のときにアイ
ンシュタインのテレビにはまり、
物理学に興味を持ちました。二
十四歳で高校に入学、二十七歳
でなんと名古屋大学に合格し、
その後は数学教諭として働いて
います。このような人生を歩ん
できた宮本さんが伝えたいこと
は「キミはひとりじゃない」で
す。

私がこの本に出会ったのは小
五です。小五の自分にはこの言
葉が響かされていました。この
本に出会った時点で直接ではな
いけれど宮本さんには出会って
います。つまりこの本に出会っ

ているということとはひとりじゃ
ないということです。つまりい
きにこの本を開けば、今の自分
に必要なヒントを得ることがで
きます。たとえば、勉強が苦
手、将来が不安、親とうまくい
かない、友達がいらない、毎日
つまらないなどです。一人一人
なやみは違うけれど、このよう
になやんでいる人に宮本さんは
よりそってってくれています。

「勉強ってなんのためにある
のだろう」と思ったことがあり
ます。どちらかというと私は勉
強は嫌いです。この本では勉強
がなぜ必要なのか教えてくれま
す。今このように文章を書くの
ができるのは勉強しているから
できることが分かります。その
時たといえ役に立っていないく
ても、いつかは役に立つことがあ
ると思えば勉強が必要な理由が
分かります。勉強は自分のため
にするものだと思います。勉強
をしたいというきっかけは人生
の中で必ずでてくると思いま
す。今勉強すれば、大人になっ
てから選択肢を広げることでも
できます。宮本さんも同じ経験
をしているから、キミによりそっ

て考えてくれます。

また、毎日がつまらないな
ら、目標を立てればいい、目標
を立てれば毎日に変化するから
つまらなくなくなると思うと宮
本さんは話しています。

この本は今の自分に必要なこ
とをいろいろ教えてくれます。
そして「キミはひとりじゃない
」ことも教えてくれます。こ
の本を手に入れば少しでもなや
みが解決されると思っていま
す。自分の未来を幸せにできる
のは自分しかないのだから未
来の自分のために明日を生き
て、人生がすばらしいものにな
ることを宮本さんは祈ってく
れています。なやみを持つてい
ならこの本を開いてみてくださ
い。大げさかもしれませんが、
この本を読めば心が楽になり、
考え方も変わるかもしれないと
思っています。

『キミのためにできること』
(宮本延春、WAVE出版、二
〇〇七)



中学生の部 優秀賞

永遠ではない恋

暁中学校 二年

藤谷 優衣

『すべての恋が終わるとして
も』というタイトルを最初に見
たとき、私はとても切ないと思
った。恋が必ず終わってしまう
なら、始める意味があるのだろ
うか、と考えたからだ。

しかし、その「終わり」とい
うものがむしろ恋を特別なもの
にしていると気づかされた。

この作品で描かれているの
は、決して永遠ではない恋。だ
からこそ、登場人物たちは今あ
る時間を懸命に大切にしようと
する。彼女たちを見ると、私も
「限られた時間だからこそ本気
で人を思える」と感じた。もし
恋が永遠に続くものと分かっ
ていたら、私たちはこんなに必
死になれないのかもしれない。

また、この本を読んで印象に
残ったのは、「恋は人を弱くする
だけではなく、強くもする」と
いう所だ。好きな人がライバル
にとられてしまう不安や、思い
を伝えられない悲しみは確かに
辛い。でもそれを経験したから
こそ他人の痛みに気づき、相談
ののったり、優しくなれたりす
るのだと私は思った。登場人物
の姿を通して、恋は人を成長

させる力もあると教えられた気
がした。

私も今まで、誰かを好きに
なって不安になったり、嫉妬し
たりしたことがもちろんある。

その度、諦めようか、やめた
方がいいのかなど落ち込んだり
していたけれど、今振り返って
みるとその経験があつたから今
の自分がいるのかなと思う。冬
野夜空さんの作品は、そういう
一つ一つの気持ちを「意味があ
る」として背中を押してくれて
いるように感じた。

『すべての恋が終わるとして
も』という言葉は、初めて見る
とかなりさみしい言葉に見え
る。私だってさみしいなと思っ
た。しかしその言葉の裏には
「終わるからこそ今を大切にす
ることができるといふ前向き
なメッセージが込められている
のではないかと思う。

恋の終わりを恐れるより、今
誰かを大切に好きだと思えるこ
と自体に価値があるのだとこの
本は教えてくれた。

これから先の人生で、私も
きっと色々な出会いや別れを経
験するだろう。それもちっと

辛かったり、悲しかったりするはず。

恋が始まったと思えば、一瞬で終わってしまうかもしれないし、心に大きな傷を負ってしまったかもしれない。それでも恋は決して無駄な物ではないと思う。

どんな終わり方でも、そのときの気持ちや思い出は「経験」として私自身に残る。そしてそれが、次の一步を踏み出す力になるのだと信じた。

『すべての恋が終わるとして』

『すべての恋が終わるとしても1140字のさよならの話』
(冬野夜空、スターツ出版、二〇三三)

も』を読んで恋をすることの意
味について深く考えることがで
きた。たとえ、永遠ではなく、
終わりが待っているとしても、
傷ついたり、つけてしまったら
したとしても、人を好きになる
ということは儚く、切なく、で
もとても美しいものだ改めて
考えた。

真反対な世界

暁中学校 二年

小野 羽輝

一九四五年八月、日本に二つの原子爆弾が落とされたあの時から早八十年。今は皆声を揃えて「戦争はしてはいけない。」と言える。しかし「はだしのゲン」を読んだ分かった。今と真反対だということ——。

僕は一昨年の八月六日、あの場所へ行った。原爆平和記念資料館で目にしたことはとても衝撃的で、こんなことが現実に起こったとは思えなかった。二年前の僕は半分旅行気分で行っていた為あまり重要視していな

かったと自分では思う。勿論、

そこで学ぶことも多々あった。当時の僕はそれで満足していたのである。それで、あまりあの時の事を覚えていない事を今頃になって恥ずかしく思った。しかしまた再びあの場所へ行けるという事になり、少し嬉しくなった。もう一度考え直すきっかけができたから、この本とも出会えたと思う。

ただ、この本と出会えた最大のきっかけは、テレビを見ていた時、某テレビ番組の番宣でぞ

の本の特集を見ると聞いたからだ。その時、あの事を思い出し、「これだ!」と思った。

読んでいる間に今までの知識では、想像もつかない事が書いてあり、とても胸が苦しくなった。更に戦争の事をかなり知っていると思っていた自分が、少し情けなく思った。

はだしのゲンを読んで一番頭に残ったのは、「戦争に協力しない奴は非国民だ!」というもの。僕はこれに衝撃を受けた。今と真反対な世界だったからだ。作者の中沢啓治さんのあとがきには、こう書かれている。「もう二度と戦争と核兵器は許さない。」と。平和の尊さを改めてこの本で痛感した。実際に被爆したからこそ分かる事を、後世に絶対に伝えなければなら

ない。そういった、メッセージが隠れていると僕は思う。先日、証言者の人がこうおっしゃっていた。

「歴史は絶対に繰り返される。だから後世に伝えなければならぬ!」

この言葉が身に沁みた。後世に伝わらないとまた同じようなことが起きるに違いない。と証言している。また同じようなことは絶対に避けなければならぬと、証言者の方と本でより一層その考えが深まった。

僕はこの本を通して、目の前で起きている事象と向き合い懸命に生きることの大切さを学んだ。日本で起きた戦争は、目を

背けてはいけない事実であることを、戦争を知らない僕達も正しく知り、平和について考え続けて行くことが必要不可欠である。そして、この本の中に中沢さんが戦争中毎日飢えていても、苦しくても、好きな絵を描いている時は幸せだと綴られている。今ある、「当たり前」の

幸せを僕達は守っていかなければいけないと強く思った。「平和」について学んでいる今だからこそ、この本をみんなに紹介したいと考えた。

『はだしのゲン』(中沢啓治、汐文社、一九八八)

一般成人の部 最優秀賞

妹へ。絶対に読めよ。

N高等学校 二年

竹内 杏凛

妹へ。私たち二人姉妹だけでなく、他の姉妹と比べると本当に仲が良くないとお姉ちゃんは思っているよ。私たち姉妹は最近まともに話したのがいつだったか覚えていないくらい仲が悪い。どちらかが話しかけても、大体ぶっきらぼうに返事をし

あっているだけだ。私は、そんなあなたに薦めたい本がある。それは、『舟を編む』という本だ。前、貸したが、あなたのこ

とだから、絶対に読んでいないと思う。だから、もう一度薦めたい。お姉ちゃんが薦めたものは頑なに読まないあなただけど、この本だけは、嫌々でもいいから読んでほしい。なぜなら、この本の登場人物は皆、私たち姉

妹に似ているから。この本を読んだら私たちの関係も少しは良くなるんじゃないかな。

この本は、『大渡海』という辞書を、長い年月をかけて、完成させていく物語だ。

本題の私たちに似ているところを書く前に、あなたに学んでほしいことがある。それは、一つの物事を最後までやり遂げることの楽しさだ。小さいときは、負けず嫌いで、何でもやり遂げていたのに、最近はそういう場面を見ていない気がする。

まずはこの本を読んで辞書が完成したときの達成感を味わってほしい。

では、本題。私は、この登場人物は、私たち姉妹に似ている

と書いたね。妹よ、どこら辺が似ていると思うかい。仲が悪いところだと思う？ それとも性別だと思う？ 全部違うよ。正解は、皆ちよつぱり不器用なところだ。これを聞いて、あなたは、不器用じゃないと反抗するかもしれないが、お姉ちゃんから見たらあなた相当な不器用さんだよ。もし気づいていないなら、この本に出てくる、西岡さんの視点と、馬締さんの視点をじっくり読んでもらいたい。とくに、馬締さんの視点の、香具矢さんとの恋愛が描かれているシーンは、私たち姉妹にとても似ている。馬締さんは、本当に口下手で、香具矢さんは、仕事一筋の仕事人間。これもものすごく私たちみたいじゃない。私が馬締さんで、あなたが香具矢さん。この二人は、結ばれなさそうだと思うが、実は、結ばれた。妹よ、なぜかわかるか。それはね、「言葉」でつながったからだ。口下手と仕事人間なのに、言葉でつながって不思議だと思うだろう。二人がつながったきっかけは、馬締さんが香具矢さんに送った恋文だ。そこには、言葉の豊かさと、言葉の使い道が全て詰まっている。

そこで気づいてほしい。私たちは、言葉を伝え合う時間があるからに足りない。読む前のあなただったら、こいつと話なんてごめんだくらいに思っているかもしれない。でも、この本を読んで、言葉の豊かさに気が

づいたら、考えも変わって、私たちも仲良くなれるんじゃないかな。仲の悪い原因はまだまだあるけど、この本を読んだ後の私たちには、「言葉」というものがあるから、良い方向に行く

一般成人の部 優秀賞

門田隆将著 「慟哭の海峡」と出会って

園田信子

今年には終戦八十年、テレビや新聞での特集も多く、私もいくつかを見た。そんな折、図書館で「慟哭の海峡」に出会った。何気なく手に取った本なのに、読んで驚いた。戦争中に、台湾とフィリピンの間にある「バシー海峡」で起きた二人の若者の事を書いたノンフィクションだった。

二十十三年、二人の老人が亡くなった。その一人は中嶋秀次さん。戦争中、上等兵として乗っていた輸送船が、バシー海峡で撃沈された。その後も攻撃されながら、十二日間も海を彷徨い数少ない生存者となった。過酷な様子は、読みながらも何度も動悸がした。

ふと舅を思い出した。もう三十年も前、入院した舅に付き添った事があった。体を拭く時、

んじゃないかな。
妹へ。絶対に読めよ。姉より。

『舟を編む』（三浦しをん、光文社、二〇一一）

背中に大きな傷跡を見つけて「お父さんどうされたのですか」と尋ねると、戦争中のことを話し出した。舅も又フィリピン沖で船が攻撃されて沈み、四日間海に浮いていたと。傷口は膿んで蛆がわいたとも。驚きのあまり、そーっと拭くと「もう大丈夫、痛くないよ」と笑われたが、知らなかつた舅の心の奥底が垣間見えたようで辛かった。

もう一人は、やなせたかしさん。丁度朝のドラマ「あんぱん」を見ていた頃なので、ご縁を感じながら読んでいたら、どんな気持ちで落ち込んで行った。しかも丁度その日に、やなせさんの弟千尋さんが、テレビの中でも戦死してしまうのだ。千尋さんは、バシー海峡の海の底で、亡きながらも何もないうまま、紙切れだけの死を告げられ、その後

のやなせさんや家族の辛さは、ドラマの中でも語られて何度も涙した。

バシー海峡で撃沈された中嶋さん。弟を失ったやなせさんの二人は、戦後心に誓ったことを実現して行く。

中嶋さんは、昭和五十六年数多くの困難を越え、沢山の協力者も得て、バシー海峡を望む丘に「潮音寺」を建立。バシー海峡で亡くなった人達の法要を叶えたのだった。

やなせさんの活躍は広く知られるところ。ただ、明るいイメージが多かったが、こんな辛い過去を持つておられたとはびっくりだ。

私は今八十才。いつも終戦の年と重なる訳だが、何か出来ているだろうか。若い頃は、広島に住んでおり、毎夏「原爆の日」

に関わるイベントにも参加した。あの残酷な原爆の事も沢山学び、戦争の恐ろしさも聞いた筈。しかし自分で何をしたらろう。反戦歌を歌ったり、イベントの手伝いをしたくらい。「慟哭の海峡」に出会った時に、後めたく感じた。

世界ではあちこちで戦争が続き、大勢の人が亡くなっている。こんなことが無くなるよう、二度と戦争が起きないように、私には何が出来るのだろうか。

世界に向けて：なんてことはもう出来ないが、せめて自分の足元にいる、子や孫に伝えて行かなければならない事がある。この本を読んで強く思ったことでした。

『慟哭の海峡』（門田隆将、KADOKAWA、二〇一四）

一般成人の部 優秀賞

トナカイのカルパッチョ

皇學館大学 一年

谷口稜太

人生がどうにも鬱々として、つまらなくなった時の最終手段として、やろうと決めていることがある。

まず、スウェーデンに行く。オーロラを見に行くのではな

い。トナカイのカルパッチョを食べに行くのだ。もしかしたら、お金、言語の壁、品切れ等により、トナカイのカルパッチョを食べられないかも知れない。でも、トナカイのカルパッ

チョコを食べる姿を、遠くに行く自分を想像する。

私がこの、トナカイのカルパッチョを知ったのは、中学生の時に読んだ『世界のへんな肉』という本からだった。

この本では、著者が世界中で食べたお肉と、その場所での思い出が、面白可笑しく書かれている。アルマジロ、キリンといったなかなか食べる機会が、なさそうなお肉が紹介されるこの本で、私の目に特に留まったのが、トナカイのカルパッチョだ。

文章として書かれた料理で、お腹が空いたのは、この時が初めてだった。口の中であって、鹿の肉に近くて、その上カルパッチョとしての形が一番あっていると、著者に言わせるその味。中学生だった私には、スーパースーパーに売っていないその肉の味を想像し、文章でその美味しさを味わうことしかできなかった。

その時から少しだけ大人になって、分かったことがある。人は簡単に、自分の行動に制限をかけてしまう、と言うことだ。

初めての店にためらいを持つ。どこかに行きたいと思いつながら、「そんな時間はない」と、見切りをつけてしまう。中学生のときより、行動力も行動範囲も増えたはずなのに。そんな時に、トナカイのカルパッチョは役に立つ。



なんだか鬱々としたことの続く、こんな今だからこそ、私はその日々を破れるお守りを持つ。私は英語が上手くない。スウェーデン語は一言も喋れない。お金もないし、勇気はもつとない。そんな私でも行こうと思えば、いつでもトナカイのカルパッチョを食べられる。いや、別にトナカイのカルパッチョじゃなくてもいい。そうだと思いつけば、海でも、家の近くのパン屋でも、私は行ける。足枷は端からないし、どこにだって行くことができる。私にとってトナカイのカルパッチョは、それを思い出させてくれる魔法の言葉なのだ。

私はいつでも、トナカイのカルパッチョを食べに行ける。本の中でも、もちろん現地でも。

『世界のへんな肉』（白石あづさ、新潮社、二〇一六）

一般成人の部 優秀賞

読書論―心から言葉を生み出す―
AI時代における読書の意義とは

横山 美 菜

最近、会社でAIが導入された。英語や中国語の翻訳、会議資料の作成等を瞬時に行い、業務の効率化に一役買ってくれている。ある日、子どもの夏休みの宿題を見ていた私は、AIは作文をどれだけ書けるのかと思い、『からすのパンやさん』の感想文を小学校低学年の設定で書かせてみた。出力されたのは以下のような文章である。（一部抜粋）

「このお話では、からすのパンやさんが、いろんな種類のパンを作ってお客さんに届けるお話です。パンを作るのが楽しいという気持ちで伝わってきて、わたしもパンを作りたいくなりました。

最後には、パンやさんがとてもにぎやかになって、みんなが幸せそうにパンを食べるシーンがすごくほっこりしました。からすが一生けん命に働いて、みんなを喜ばせている所がとてもすてきだと思いました。」

当たり前だが、うまくまとまった文章だ。あらずじ、感想が良い塩梅でまとめられている。しかし、何か物足りなさを

私は感じた。それが何なのかを

解明するべく、私は息子が小学校一年生の時に実際に書いた『からすのパンやさん』の感想文と比べてみた。（一部抜粋および表記を一部漢字に変更）

「こんな面白いパンが給食に出てきて、クラスのみんなで食べられたらいいなと思いました。でもこのパンはバローには売っていません。からすのパンやさんに売っています。」

この二つの違いは何だろうか？最大の違いは、息子の文章は読後にバロー（家の近所のスーパー）という実生活と結びつき、心で感じたことを文章にしているという点だと思う。

心で感じて、心から言葉を生み出せるのは人間だけができることだ。歌人の俵万智さんが『生きる言葉』の中でこう述べていた。

「生きた人間である私たちが目指すのは、心から言葉をつむぐこと。AIが1から100を生むのを横目に、自分は0から1を生みたいと思う。」

1から100を生むか、0から1を生むか――。まさに前出

の二つの読書感想文の違いをうまく言い当てている。AIの感想文は、からすのパンやさんの話の表現の中から言葉を選び、それを感想文にしている。一方、息子の感想文は話の中の表現でなく、彼自身の心の中に気持ちが生まれ、それが体験と結びついた文章として生み出されている。

確かにAIは文章を上手に作り、まとめてくれるので、ビジネス面でうまく付き合っていくのがよいと私は思う。しかし、人々を感動の世界へ誘うのは人間だからこそできることだ。人間には心がある。先人たちは彼らの動かされた心を文章にし、素晴らしい作品を生み出してきた。現代に生きる私たちはそれらを本という形で受け取り、自分の心を豊かにしてまた0から1を生み出していくのだと思う。このような『生きる言葉』を読書という形で受け取るため、古今東西、先人の残してきた本を現代の人々に読んでほしい。

『生きる言葉』（俵万智、新潮社、二〇二五）



エッセーで、 書いた人と出会う

高田晴美

単なるお薦め本の紹介をこえて、「この人だからこそ書けた文章だ！」と書いた人を思わせられた作品を受賞作として選んだ。

小学生の部最優秀賞は鮫島誠法さん。戦後八十年だから戦争に触れた作品が多かったのだが、その多くは「こんな体験談を聞いた」という論調が多い中、鮫島さんは「話したくない、話せない記憶」に思いをはせているのが心に沁みた。黒田航平さんは未知の世界に触れる意義を見出した。読書とは、自分とは一見無縁の世界を知ることでも自分までもが更新されるものなのだろう。中村椎南さんは出だしから引き込む文章で、お気に入りの作家の新作にワクワクする気持ちがあふれと伝わってきた。古典や古語にきやいきやする気持ち、分かる……。中村美玲さんの「私は一人が好きだ」と断言しつつ小説の中の友情に動揺する感じ、本好きには共感できる孤独と憧憬で、これも分かる……。読書とは、読者と作者や登場人物と繋がることでもあるが、このようなエッセーを読むと、本好きどうしも繋がった気になる。

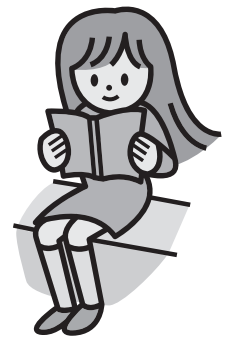
中学生の部最優秀賞の杉野暖真さんの作品は、今回の応募作の中で個人的には一番堪えた。本の中の友情のあり方と自分とを見比べて「僕は選択を間違えた」とこみ上げてしまう思い。でも杉野さ

んはまだ若い。いや、何歳でも今が一番若い。どうにでもできるはずだ！ 廣瀬甘奈さんは逆に、人生いつからでもどうにでもできるはず！ を体現できた方の話。自分を変えるような人との出会いは、本でもできることが分かる。

藤谷優衣さんは、終わりがあつても、その時その時の気持ちすべてに意味があることを伝える。人生の儚さ、無常観は、決して虚しいものとは限らないのだ。小野羽輝さんは、知識で知ったつもりになつてた戦争を、物語の持つ実感に迫る説得力が塗り替えた体験を語った。未経験の人の心にも真に迫った追体験をさせる、物語の力を再確認したい。

一般成人の部最優秀賞は竹内杏凜さんの妹さんへの手紙？ 応募作中随一のインパクトのある作品。妹さんにこれ読めよ！ 絶対読めよ！ と言ひ募る様子は面白過ぎた。それとともに、言葉で伝えることをあきらめない気持ちも伝わった。妹さんにも伝わりますように。園田信子さんの作品の義父の背中への傷に彼の「心の奥底を垣間見」たシーンに、一つのドラマを見るようだった。何気ない身近な人一人一人がドラマを持っていることに思いが至る。谷口稜太さん、タイトルからして目をひく。「トナカイのカルパッチョ」なんて何かの比喩かと思つたら、本物だった！ 人生が鬱屈したときやろうと決めていることがあるというところは、生きていく支えになりそう。横山美菜さんの作品には、ある生身の個性、ある一人の人間から生まれた言葉、文章だ

からこそその意義、面白さを、今一度皆で確かめ合いたいと思わせられた。単にうまく整った文章のためだったなら、エッセーコンクールなんて必要ない。我々は、その文章が出て来た人間と出会いたいのだから。



本と出会い、 心と向き合う

箕浦龍一

今回初めて、「読書に関するエッセーコンクール」の審査員を務めました。多くの作品を読み進めるに連れて、皆さんの読書に対する関心の高さ、多様性に触れ、嬉しく思いました。

一般成人の部の最優秀作品は、竹内杏凜さんの「妹へ。絶対に読めよ。」です。

この作品は、単なるエッセーではなく、関係がうまく築けない妹さんに宛てた切実な「手紙」そのものです。

竹内さんは、一冊の本『舟を編む』を妹さんに読んでもらうことで、妹さんとの関係を修復しようとして試みます。この本だけは、読んでほしいという言葉には、姉としての深い愛情が溢れています。

本の中の「不器用な」登場人物たちに、ご自身と妹さんの姿を重ね合わせ、二人の関係がなぜこじれてしまったのかを「言葉」を伝え合う時間が足りないからだと、深く洞察していきます。

この「手紙」が無事に妹さん

に届き、お二人の間に豊かな「言葉」が交わされることを心から願っています。

中学生の部の最優秀作品は、杉野暖真さんの「絆で壁を乗り越える」です。

杉野さんのエッセーは、中学生の誰もが抱える「人間関係の悩み」に正直に向き合っています。父親の薦めで出会った『黒い兄弟』が、杉野さん自身の最も切実な悩みと真正面から向き合うきっかけになりました。

「陽キャ」と呼ばれる存在を苦手としながらも、無理に合わせている自分。その苦しい胸の内を隠さずに綴っています。

過酷な運命の中で「固い絆」を結ぶ主人公たちの姿は、杉野さんの目にはどれほど眩しく映ったことでしょう。本の中の「真の友情」を鏡として、自らの現実を省みること、杉野さんは「悩みに決着できるカギ」が物語の中にあると気づきました。

そして、そのカギを「僕は手に入れていないのではないか」と悔いながらも、同じ悩みを持つ世代の仲間たちに向けて「今いる友達を大切にしたい」と力強く呼びかけています。

小学生の部の最優秀作品は、

鮫島誠法さんの「今から八十年前の記おく」です。
軍艦が好きという気持ちだが、夏休みの呉市での体験へとつながり、本物の戦艦や潜水艦に触れ、戦争の歴史への学びを深くしました。

そして『赤い日』という一冊の本との出会いが、鮫島さん個人の体験を、ご家族の記憶、特に戦争のことを話しながらないおばあ様の態度と結びつきました。本の世界と身近な人の記憶が重なった瞬間、遠い過去であった「八十年前の記おく」が、生々しい実感となったことでしょう。

戦争に関する本を読んだ時にありがちな「戦争は怖い」という感想に留まらず、「主人公はなぜ記憶を語らなかつたのか」と思いを馳せ、「今の平和が当たり前だと思つたらいけない」と自らの問題として捉え直しています。



読書に関するエッセー
入賞作品集 二〇二五
令和七年十二月発行
発行 四日市市教育委員会
編集 四日市市立図書館